

# 定住・交流人口の拡大で町の再生へ



## 一般社団法人おらが大槌夢広場

宿泊・サービス業 [大槌町]

代表者 代表理事 白沢 和行 氏

所在地 岩手県上閉伊郡大槌町大槌 23-37-3

TEL: 0193-55-5120 FAX: 0193-55-5122

HP: <http://www.oraga-otsuchi.jp/>



### 取り組み(事業紹介)

#### 大槌町の交流人口拡大を目指す 町民による町民のためのまちづくり

震災による津波で壊滅的な被害を被った大槌町。市街地の6割が破壊され、多くの町民が避難所生活を余儀なくされるなど、町としての機能を失ってしまう。

そのような中、町民らにより「町は今後どうしていくべきか」の話し合いの場が持たれるようになる。その後、そのコミュニティから“自分たちの手で自分たちの町を作り上げよう”というスローガンのもと、平成23年11月に立ち上げられたのが一般社団法人おらが大槌夢広場だ。

町民のコミュニティ再生の場としての復興食堂の運営からスタートし、町内で新規創業支援、さらに震災の経験や地域資源を生かした語り部事業や復興ツーリズム事業を開始。震災を経験した町民を交えたワークショップを中心とした企業研修や修学旅行など、団体のニーズに合わせてカスタマイズできるコンテンツを生み出した。被災地への復興ツーリズムが徐々に下火になりつつある中で、年々参加者を伸ばしており、継続的に大槌町の交流人口を増やすモデルとして成果を上げている。

### 1 これまでの課題

- 過疎化の進行により大槌の産業衰退を危惧
- 一過性の被災地ビジネスではなく、持続性と収益性のあるビジネスが必要

### 2 課題解決の方法

- 震災の体験を生かした被災地ならではのツーリズム事業を立ち上げ
- 企業などのニーズに即したコンテンツにより年間1万人を受け入れるまでに成長

### 3 現状と今後のビジョン

- 補助金に頼らない持続的なビジネスモデルを構築。全国から人を呼べる町づくりを目指す

### 1 これまでの課題

#### 町の活力を取り戻すために 定住・交流人口の増加に向けた持続的取組を

町民らが自主的に今後の町のあり方を考え話し合う場から生まれたおらが大槌夢広場。「地元の方々のやる気や熱意、支援に来てくださっていた外部の方々の知恵がうまく融合した形で始まりました」と、事務局を務める神谷末生氏は話す。

町のあり方を巡って何度も話し合いが持たれる中で、特に議題に上ったのが今後の町の将来。もともと過疎化が進んでいた大槌町だが、震災によりさらに人口減少が進み、このままでは町の衰退が加速してしまうと考えられた。それを止め、町の活力を取り戻すには町の定住人口・交流人口を増やす必要がある。現在おらが大槌夢広場が取り組むツーリズム事業がスタートしたのは、そのような問題意識が背景にあった。

しかし、震災の経験を聞いて町内を見学するだけのコンテンツでは、今後の継続性に不安がある。組織のみならず町の持続的な発展の観点からも、一過性の事業で終わらないコンテンツの開発が必要だった。



### 2 課題解決の方法

#### 被災地ならではの体験を生かしつつ 企業のニーズに即した研修プログラムを開発

町の持続的な発展を支えるためには、継続的に集客できるコンテンツが必要。その視点から平成24年4月に生まれたのが、ワークショップ型研修を中心とし、オーダーメイドが可能なツーリズム事業だ。

震災の話や被災地を見学するツアーは沿岸部に数多くあり、差別化が難しい。また、震災から時間が経つにつれて、そうしたツアーのニーズは徐々に薄れていくと想定された。そこで、考え出されたのが企業や団体、学生などを対象とした、ワークショップ型の研修だ。震災時の体験をもとにして決断力やコミュニケーション力を養うためのリーダーシップ研修や、いま被災地で顕在化しているさまざまな問題に対し結論を見いだすまでディスカッションを行う研修など、被災地ならではのコンテンツを開発。いずれも受け身の研修ではなく、参加者には大槌町民になりきってもらい、さらに町民を交えたリアリティのあるもの。また、企業や団体のニーズに合わせた、自由なオーダーメイドも可能だ。中でも、リーダーシップ研修は「決断の重みを体感できる」「合意形成の難しさがわかった」など参加者からの高い評価を得ている。

このツーリズム事業は、魅力的なコンテンツと企業などにターゲットを絞ったプロモーション活動が実を結び、中にはリピート率80%というプログラムもあるという。これらのツーリズム事業を含めた同団体の一連の事業は、1年目は256団体約6000人、平成26年には約500団体10000人を受け入れるまでに至っており、被災地におけるツーリズム事業のひとつのモデルになり得る可能性を見出し始めている。

### 3 現状と今後のビジョン

#### 補助金に頼らない組織運営を目指す 住民の力で全国から人を呼び込める町へ

当初、復興ツーリズム事業は口コミや企業同士の情報交換によって広がっていたが、現在はいわて沿岸復興ツーリズム協議会や地元バス会社、大手旅行代理店との提携などによって、さらに受け入れ数を増やしている。また、あえて有償で行っている語り部ガイドも、「震災の悲惨さ」だけでなく、「生きることの大切さ・難しさ・希望」など、自分たちだからこそ伝えられる内容を語ってもらい、好評を得ている。こうした取組の結果、設立当初は緊急雇用創出事業を活用していた同団体だが、平成27年4月からは国の補助金には頼らず、民間助成金と自主事業による運営に切り替え、今後は完全な自走を目指している。

おらが大槌夢広場では人材育成を軸としてコンテンツを開発し、町民の成長とともに町づくりを進めてきた。その成果がじわじわと町と住民、そして大槌を訪れる人々へ浸透してきている。「一般的な観光資源はなくても、見せ方と作り方ひとつで人の流れは変わる。観光地でなくても人を呼ぶことができるモデルになれば」と神谷氏は今後のビジョンを語る。



私たちが  
創る

産業復興創造

東北の経営者たち

平成28年2月